

● S I 勉強会質疑応答議事録

日時 : 2010年12月21日(火) 11:00~12:00
場所 : 富士通汐留本社 6階 ユーザコミュニティサロン
説明者 : システム生産技術本部長 柴田 徹

質問者A

Q. 標準化技法は、30年も前から各社取り組んできており、一方でなかなか浸透しない歴史だったと記憶しています。ベンダーの論理をお客様が受け入れてくれるようになるために、過去の取組みと何がどう違うのか教えてください。

A. お客様が自ら所有し自ら運用するケースであれば、お客様は自分たちの運用に都合がよいように仕様を決められてしまう面があります。所有という形態から変わってきているので、仕様に関しても変化が生じています。

今はお客様の求めている考えを我々が受け止め、我々が主導して仕様を検討していきます。自らの運用スタイルに合わせようとするお客様は一部だけになってきています。ICTの効率的な利用についてベンダーとして提案していくことで標準化技法は浸透させられると考えています。

Q. INTARFRMについて、もう少し具体的に説明してください。

A. フレームワークは従来から提供しています。INTARFRMは開発ツールに留まらないフレームワークになっています。過去に提供してきたSDEMやSDASといったものを全て取り込んで一体化させました。富士通がこれまで培ってきたお客様サポートのノウハウを標準化し、運用面まで含めたシステムの品質を担保することで、高品質なシステムをご利用頂き、お客様の満足度を高められると思っています。

Q. これらの取組みを海外に展開しているのですか？

A. 富士通のパッケージやソリューションはINTARFRM上で構築し提供していきます。既にPRONESというパッケージは提供を開始しています。海外では東南アジアや中国を中心に実績が出てきました。今後、富士通の開発環境にINTARFRMを搭載してグローバルに共通な開発体制を構築していきます。

質問者B

Q. SIは標準化された工業製品をつくる工程に似ています。しかし今のビジネスは変化が激しくて、ビジネスとITの同期が大事だと思います。日本のベンダーはシステム構築のスピードが遅いと感じています。外資系ベンダーはアジャイルなど違う方式を使っているはずですが、富士通はその点をどうお考えですか。

A. 富士通はアジャイルも、新要件定義手法やINTARFRMと組み合わせて提供します。新要件定義手法では、お客様の要件を、経営、業務、業務システムの3段階に分けています。業務システムについては、お客様とスピードにあわせて、決めながらつくることができそうですが、経営や業務の観点を何も踏まえずに要件を決めると失敗すると考

えています。従って、何をどこまで決めたら、あとはアジャイルを使えばいいかという基準を明確にしていきます。

- Q. 外資系ベンダーでは6ヶ月でテープカットできないものは認めないこともあります。日本のベンダーは数年もかかっています。スピードアップすることは可能なのでしょうか。
- A. 6ヶ月といわず、3ヶ月でも可能です。ただ、どれだけのものをつくるかということが重要です。例えばアジャイルで1メガを3ヶ月で作れと言われれば、現時点では無理だと言わざるを得ません。1メガ9ヶ月だったら構築した例もあります。ただ、そのときにお客様がどの程度の品質を求めるかが重要です。欧米品質か日本品質か。その点をお客様と合意したうえで進めなければならないと考えます。

質問者C

- Q. 過去にSI4つの革新を取り組んでこられたが、その中でワークスタイルの革新は今のくらい進捗しているのですか？
- A. 昨年、標準化による高品質を実現するツールとして ProjectWEB を紹介しました。かつては SDEM や SDAS、今は Simplia シリーズとして開発ツール群を販売しています。ProjectWEB の中にも開発管理やマネジメントツールが搭載されているのですが、Simplia と ProjectWEB の間で同期が取れていないという課題がありました。今後、開発 PaaS を通じて、社内利用を前提にあらゆる開発ツールを環境を提供することで、それぞれの状況、ニーズに応じた開発を自由にやらせます。ただし、条件ごとにどういったツールを使うべきか、そのガイドラインや計画書の雛形といったものを用意します。SE はお客様がどうしても望む条件をアレンジし、それ以外の技術開発については、全てガイドラインに沿ってやらせます。開発 PaaS をベースとして富士通グループ全体で開発技術を共有していきます。

質問者D

- Q. 富士通自前のさまざまなクラウドがあり、SFDC（セールスフォースドットコム）などもありますが、それらすべてのアプリケーションを富士通の INTARFRM 上で展開するのでしょうか。
- A. SFDC だけは対応できないと考えています。それは SFDC が SaaS 環境で垂直統合を果たしているからです。そこには INTARFRM を入れる余地がありません。そのほかの他社のクラウドは PaaS のレイヤーまでがほとんどなので、その上に INTARFRM を乗せることは可能です。各社のミドルウェアや OS に対応したサービスモジュールは用意しているので、それを活用します。いずれにせよ、富士通の「オンデマンド仮想システムサービス」がベースになります。

質問者E

- Q. プレゼンの P.9 にある SI ビジネスの過去から現在への変化によって、現状の SE 人員構成がどのように変化したのでしょうか？将来的に人員を減らしていくようなことは

あるのでしょうか。

- A. 現在、当社はグループ企業を含めて 30,000 人弱の SE 職がいます。かなりの人員がゼネラリストであり、いろいろな担務に対応できます。現場で OJT によって鍛えています。アプリケーションエキスパートや IT エクスパートといった社内認定制度も設けてプロマネ、業務アプリ、IT マネジメント、コンサルタントといった人材を育成しています。今後、SE リソースが減っていくかというとなんかそうではなく、開発が効率化されロスが減る分、より効率的に SE リソースを回していくことが出来ます。今後、従来のビジネス領域から新しい領域へ拡大していくときに、人的リソースを減らすようなことはせず、新領域へ投入していきます。他社は上流（コンサル等）に人材を回すようですが、当社は運用フェーズを取り込む流れから運用にもリソースを回していきます。

以 上